

各関係機関長 様

佐賀県農業技術防除センター所長

イチゴのハダニ類の防除は育苗期から徹底しよう！

平成26年産イチゴでは、ハダニ類が本圃定植直後から多発生で推移しました。本圃での発生を抑えるためには、本虫の寄生のない苗を生産し、本虫を本圃へ持ち込まないことが重要です。

については、下記事項を参考に、生産者に対し育苗期の防除指導を徹底してください。

記

1. 県内での発生状況

1) 本年5月下旬のイチゴ親株の巡回調査において、ハダニ類の寄生株率は5.7%（平年5.5%、前年1.3%）であり、平年並である。（図1）。

2) 気象予報では、6月の気温はやや高く、降水量がやや少ないと予報されており、本虫の増殖に好適な条件となることから、多発生することが予想される。

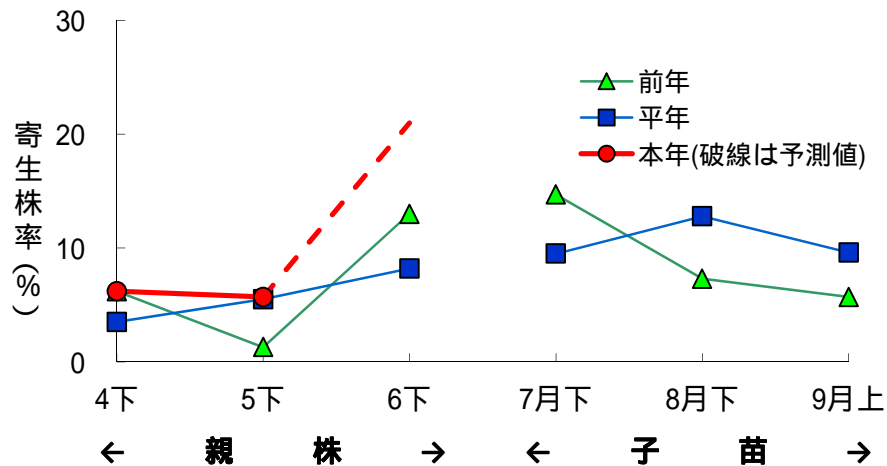


図1 イチゴハダニ類の寄生株率の推移 (平成27年産育苗圃)

2. 防除対策

(1) ハダニ類は薬剤がかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、不要な下葉等を除去した後、葉裏にも薬剤がかかるよう、十分量を丁寧に散布する。なお、ベンチ育苗の圃場においては、ベンチ下からも薬剤を噴霧する等、薬剤が葉裏にもムラなくかかるよう工夫する。

(2) 薬剤がかかりやすいよう、苗は十分な間隔を置いて並べる。

(3) 育苗期間中は、気門封鎖系薬剤(粘着くん液剤等)も活用し、薬剤抵抗性発現の回避に努める。

(4) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤のローテーション

ン散布を行う（県病害虫防除のてびきP199-200参照）。なお、薬剤防除の際は使用時期及び使用回数等の使用基準を厳守する。

(5) 農業試験研究センターが平成26年に実施した薬剤感受性検定試験において、一部の圃場でダニサラバフロアブル、マイトコーネフロアブルに対する感受性が低下した個体群が確認されているので、これらの薬剤の効果が低下した圃場では使用を控える（表1参照）。

(6) 本圃へ本虫を持ち込まないように、必ず定植前に効果の高い薬剤で仕上げ防除を実施する。

表1 県内各地のイチゴほ場で採集したナミハダニの各種殺ダニ剤に対する感受性^{a)} (佐賀県農業試験研究センター, 平成26年)

採集場所	採集時期	圃場	各剤(希釈倍数)による補正死亡率(%)								水浸漬による生存率(%)
			スターマイトFL		コロマイトWP		ダニサラバFL		マイトコーネFL		
			2000倍	6000倍	2000倍	6000倍	1000倍	3000倍	1000倍	3000倍	
A	5/30	本圃	100	100	100	100	100	100	100	84	93.6
B	5/30	本圃	100	100	100	100	100	100	100	45	97.1
C	6/3	本圃	99	94	85	92	12	0.4	26	22	98.6
D	6/3	本圃	100	100	100	100	100	100	100	98	100
E	7/7	本圃	100	100	-	-	100	100	75	67	98.9
F	9/22	育苗床	97	96	-	-	2	8	-	76	93.5
G	9/22	育苗床	100	100	100	34	95	90	100	96	95.6
H	9/9	育苗床	99	100	100	84	79	37	100	90	93.2
平成18年の結果	5~6月	全て本圃	-	-	93~100	95~100	100	100	100	98~100	

a)FL:フロアブル、WP:水和剤、希釈倍数:常用濃度、常用濃度の1/3希釈薬液(以下、1/3濃度)

-:検定未実施